

再生される銅釧

——帯状円環型銅釧に関する一視点——

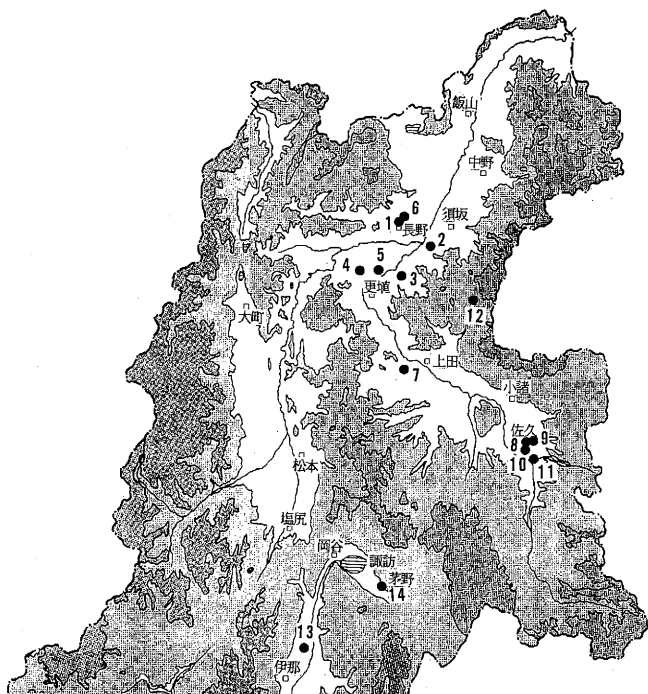
臼居 直之

I はじめに

銅釧は、貝製の腕輪を青銅で模したものであり、その原形は南海産の大型巻貝・二枚貝に求められる。北部九州では弥生時代中期後半頃に青銅器化がなされ、弥生後期には畿内から東海・関東にまで分布が拡大する（木下1980・1983）。釧の形態は、青銅器化・石器化とともに貝輪の原形を逸脱し部分的に誇張され、『呪術品』更に『権力の象徴』という特殊性を帯びてくる。ことに「鉤状突起」を付した銅釧は、民俗例から呪力をもつと解釈され（三島1973）、その原形であるゴホウラ製貝輪の男性着装者には司祭者的性格から政治的統率者的性格が付加されたと説いている（高倉1975）。銅釧の着装には、縄文時代以来の呪術性に加え、集団管理者（戦闘能指導者）としての首長権を誇示する目的が見える。

さて銅釧には、北部九州、山陰、近畿地方を中心に分布する楽浪系銅釧と称される円環型銅釧、ゴホウラ製貝輪を祖形とする立岩型（有鉤）と諸岡型（無鉤）、イモガイ縦形貝輪を祖形とする形態がある（橋口1987）。そしてこれらとはまったく異なる形態をもつ銅釧が中部高地・東海東部・南関東に分布している。この銅釧は、断面形が扁平で板状を呈し、帯を巻いた環

形状を呈する。井上洋一氏は、この銅釧を先の铸造銅釧と区別し『曲げ輪造りとも呼ぶべき銅板を単にまるめ円環をつくったものである』とし、円環形状を造る工程に铸造以外の方法を想定した（井上1989）。確かに井上氏が検討した静岡・神奈川を中心に分布する帯状円環型銅釧は、『曲げ輪造り』と呼ぶにふさわしい小型円環が大半を占め、明瞭な継ぎ目が観察される。しかしこれらを製作するための素材となる帯状銅板そのものの存在は不明であり、多様な平面形状・法量で出土する銅釧にも規格性をみいだせる。そこで筆者は、これら各地で出土する小型



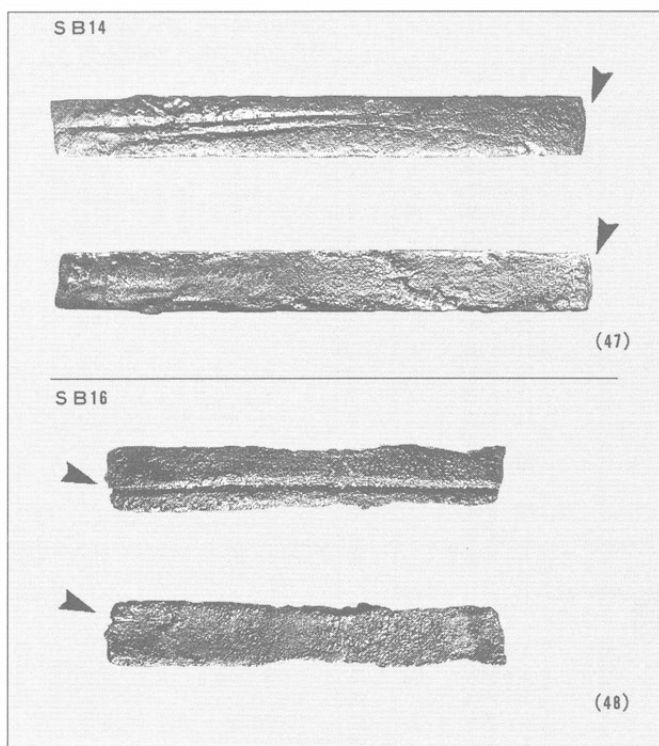
第1図 長野県内の銅釧出土遺跡（第1表参照）

円環は全て『带状円環型銅釧』の原形を失った状態を示すものと考えていた。

近年の長野県を主とする発掘調査及び報告（第1図、第1表）によって带状円環型銅釧（以下この形態を単に銅釧と呼ぶ）が铸造品であることが明らかとなり、この铸造品の一部が墓ばかりでなく、破片として竖穴住居址から出土する事例がいくつか確認された。出土例のなかでも墓壙出土の銅釧が、貝製の腕輪と同様に複数着装が通有であること、住居出土の銅釧には切断後に再加工を示す資料があることが明らかとなった。ことに後者の事例で長野市春山B遺跡における竖穴住居出土の銅釧片が本論を展開する切掛となった。以下長野県内出土の銅釧を中心に銅釧の機能及び再生過程に関する試論を述べる。

II 春山B遺跡出土の銅釧片について（第2図）

春山B遺跡の竖穴住居址内からは5点の銅釧片（34・45～48）が出土している（白居1999）。このうちSB14(47)・16(48)の銅釧は遺存状況が極めてよく、処理過程の中でブロンズ色を帯びるまでに金属質が残存していた。この2点はそれぞれ扁平に延ばされ、表面には槌状の条線が縦長に刻まれる（以下条刻と呼ぶ）特長がある。SB14の銅釧切断面は丸味を帯び表裏に微妙な膨らみが観察され（第2図上▼）、SB16の切断面は内湾し縁辺に微妙な突出が観察された。これらの切断面の状況は、前者が『折り曲げの反復』による切断痕跡、後者が『捩曲げ』による切断痕跡とみなされた。またSB16の条刻は表面にとどまらず、裏面にも及んでいることが



確認され（第2図下▼）、単なる『装飾』目的の条刻とは解釈できない状況であった。これら2点に加えSB42からは半円の銅釧片（34）が出土した。この釧片の両切断面はSB14出土の銅釧片と同様に折り曲げの反復による膨らみが観察され、半円の長さもほぼ同一であった。

本遺跡出土の条刻銅釧を集成していたところ、篠ノ井遺跡群聖川堤防地点（第1図5）と県道長野・上田バイパス地点に同一の特長もつ銅環を実見することができた（註1）。そこで、铸造銅釧の加工再生を確信するに至った。

第2図 春山B遺跡出土銅釧（1：1）（ ）内は図版番号

第1表 帯状円環型銅釧出土遺跡（長野県内）

遺跡名 (第1図番号)	所在地	出土遺構	個数	形状・形態分類	図版 No.	法量 (径・幅・厚) cm	文献
本村東沖遺跡(1)	長野市	SK3 木棺墓 (土墳墓)	5	1-円形 (a) 2-円形 (a) 3-円形 (a) 4-円形 (a) 5-円形 (a)	1	5.35 0.84 0.17 5.61 0.89 0.12 5.50 0.84 0.17 5.69 0.76 0.20 5.71 0.89 0.17	1
春山B遺跡(2)	長野市	SB14 堅穴住居	2	1-扁平破片 (c) 2-扁平破片 (c)	47 45	(ナガサ6.2) 0.8 0.18 (ナガサ2.0) 0.8 0.16	2
		SB16 堅穴住居	2	1-扁平破片 (c) 2-扁平破片 (c)	48 46	(ナガサ5.4) 0.9 0.18 (ナガサ2.2) 0.8 0.1	
		SB42 堅穴住居	1	1-破片 (c) 半円湾曲2/5	34	4.4 0.9 0.18	
四ツ屋遺跡(3)	長野市	SB09 堅穴住居	2	1-円形 (d) 湾曲3/4 2-破片 (c) 微細湾曲1/8	50 38	2.0 0.7 0.1 (ナガサ2.8) 0.9 0.2	3
鶴前遺跡(4)	長野市	SB28 大型堅穴住居	1	1-破片 (b) 微細湾曲1/4	35	(ナガサ5.4) 0.6 0.18	4
篠ノ井遺跡群 聖川堤防地点(5)	長野市	SDZ8 周溝墓 溝内	1	1-破片 (d) 湾曲2/3	56	1.8 0.5 0.12	5
北陸新幹線地点 (5)		SB217 堅穴住居	2	1-円形 (b) 2-円形 (b)	28 29	5.5 0.8 0.15 5.6 1.0 0.2	6
		SB374 堅穴住居	1	1-円形 (b)	30	5.4 0.6 0.1	
		SM213 円形周溝墓主体部	1	1-円形 (a)	25	5.0 1.1 0.15	
		堅穴住居	2	1-扁平破片 (c) 2-扁平破片 (c)	— —	未報告 (SDZ8及び春山B遺跡 出土と同形態で条刻がある。)	
県道長野・上田 バイパス地点							7
檀田遺跡(6)	長野市	円形周溝墓	1	1-円形 a	—	未報告詳細不明 (約5.5約0.5) 鉄釧と共に着装の可能性あり	7
琵琶塚遺跡(7)	上田市	第62号住 堅穴住居	1	1-破片 (c)		不明	8
上直路遺跡(8)	佐久市	第1号住居址内土壌	15 破損 13	1-円形 a 2-円形 a 3-円形 a 4-円形 (a) 5-円形 (a) 6-円形 a 7-円形 a 8-円形 a 9-円形 a 10-円形 a 11-円形 a 12-円形 a 13-円形 a 14-破損 半円 a 15-破損 半円 a 16-破損 21湾曲	6 5 11 4 4 3 3 3 3 3 3 10 7 9 8 —	6.0 0.8 0.2 6.2 0.8 0.18 6.4 1.0 0.2 6.2 0.9 0.1 6.2 0.8 0.2 5.6~6.0 1.0 0.1~0.2 6.2~6.5 0.6 0.2 5.8~6.0 1.0 0.2	9
北西の久保遺跡 (9)	佐久市	Y87号住居址 堅穴住居	1	1-小破片 (c)	39	(ナガサ2.2) 1.0 0.2	10
五里田遺跡(10)	佐久市	第2号円形周溝墓 周溝墓主体部墓壇	5 (7)	1-円形 (a) 2-円形 (a) 3-円形 (a) 4-円形 (a) 5-円形 (a) 6-破片 (a) 7-破片	12 15 14 13 16 17 18	5.8~6.0 0.8 0.2 5.6~6.2 0.8 0.2 5.5~6.1 0.8 0.2 5.8~6.0 0.7 0.2 6.0 0.7 0.2	11

離山遺跡(11)	南佐久郡 白田町	土墳墓?	4	1-円形 ㊶ 2-円形 ㊶ 3-円形 ㊶ 4-円形 ㊶	19) 22	5.8~6.0 1.0 0.2	12
陣の岩陰遺跡 (12)	小県郡 真田町	2層中黒色土内	1	1-円形 ㊶	24	6.0 0.85 0.1	13
北高根A遺跡(13)	上伊那郡 南箕輪村	遺構検出面 (柱穴群付近)	1	1-円形 ㊶	※26	6.5 0.9 0.2	14
家下遺跡(14)	茅野市	第90号土坑 土墳墓	4	1-円形 ㊶ 2-円形 ㊶ 3-円形 ㊶ 4-円形 ㊶	— — — —	5.6~5.8 0.9~1.2	15
		第100号土坑 土墳墓	破損 3	1-円形 a 2-円形 a 3-円形 a	— — —		
		8号周溝墓 No.3主体部	2	1-円形 ㊶ 歪み湾曲5/6 2-湾曲 ㊶ 歪み湾曲5/6	— — — —	3.7 1.1 — 3.5 1.0 —	

(※26は古墳時代に帰属する可能性がある。)

III 銅釧の分布と形態分類 (第1図、表1・2)

銅釧は、長野県14遺跡、静岡県12遺跡、神奈川県6遺跡、群馬県2遺跡、山梨県2遺跡、東京都1遺跡、千葉県2遺跡の合計39遺跡から出土が報告(註2)され、その分布の中心は中部地方の千曲川流域と東海地方の静岡市以東の太平洋岸沿いにある。この39遺跡の銅釧の出土遺構及び形態をみると地域によって異なる傾向を示している。この傾向を大まかに見るために仮に長野・群馬・山梨を中部高地域、静岡・神奈川・東京を東海東部域という名称で括ることとする(註3)。

A 銅釧の出土遺構と2地域の違い

まず銅釧の出土遺構には、①周溝墓主体部や周溝、土墳墓等の埋葬施設内、②竪穴住居や掘立柱建物等の居住関連施設内、③その他(溝・包含層)がある。墓壇出土は、長野県8遺跡11例で中部高地では、11遺跡14例に及ぶ。これに対し東海東部では後述するが古墳時代に帰属する可能性がある賤機山古墳下土壇の1遺跡1例(平尾・榎本1999)のみであり、今のところ確実な資料はない。住居出土は、中部高地域では長野県だけにあり6遺跡10例で、東海東部域では10遺跡14例である。この際だった2地域の出土遺構の違いは銅釧形状においても顕著に現れ、円環形状の銅釧は中部高地に、小型銅環は東海東部に偏在している。つまり千曲川流域を中心とする中部高地では墓壇から銅釧が出土し、東海東部以東では竪穴住居から小銅環が出土していることとなる。本稿では地域的な問題についてこれ以上扱わないが、今後、遺物そのものの詳細な観察を経て検討すべき課題である。

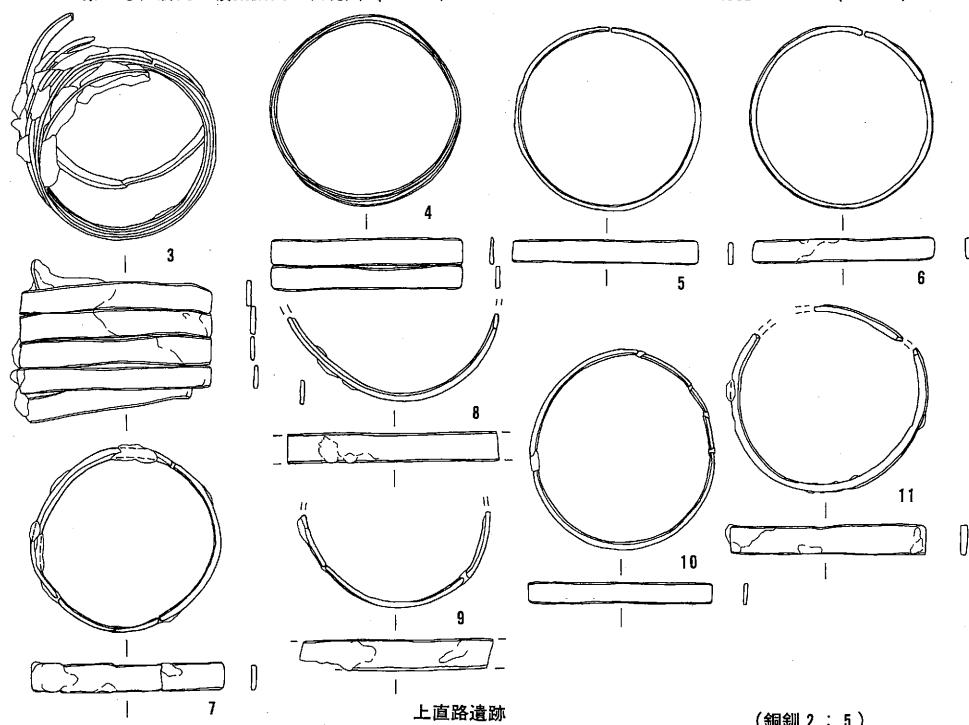
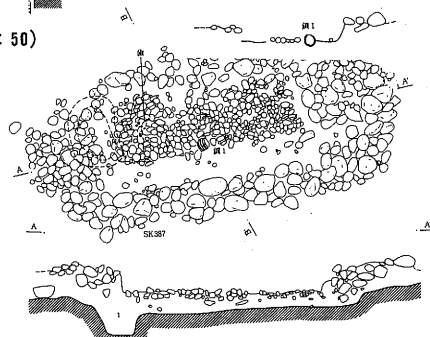
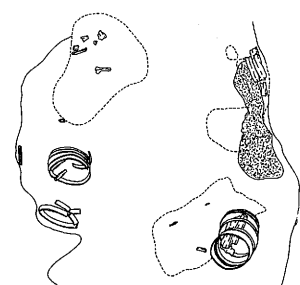
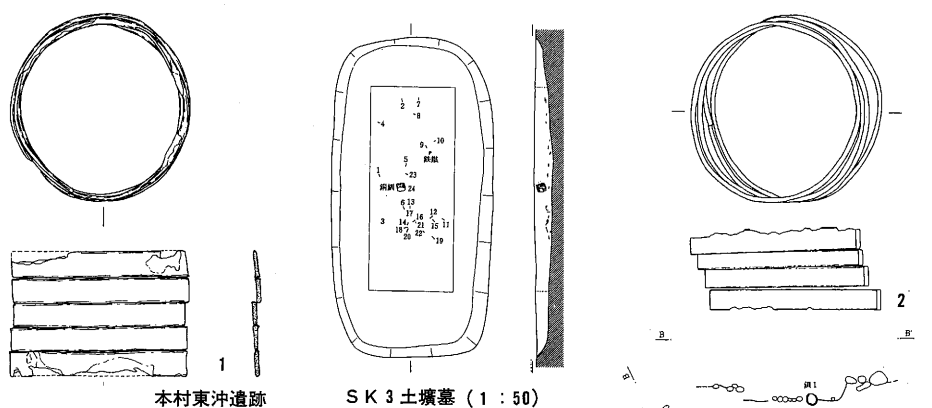
B 形態分類 (第3～7図)

帯状円環型銅釧を遺存形状で形態分類すると6種類に分類される。本稿では㊶～㊸・aという記号を用いて分類する。㊶類は継ぎ目のない鋳造品で、ほぼ正円に近い円環形状となる銅釧であり、連結して着装される。法量は直径5.8～6.0cm、幅0.8～1.0cmとなる。a類は㊶類とほぼ同形状であり鋳造品と認識される銅釧であるが、1カ所に接合部(切断部)があり端部がやや開く形態である。ただしa類には㊶類の破損品をも含んで分類したため、表中のa類を㊶

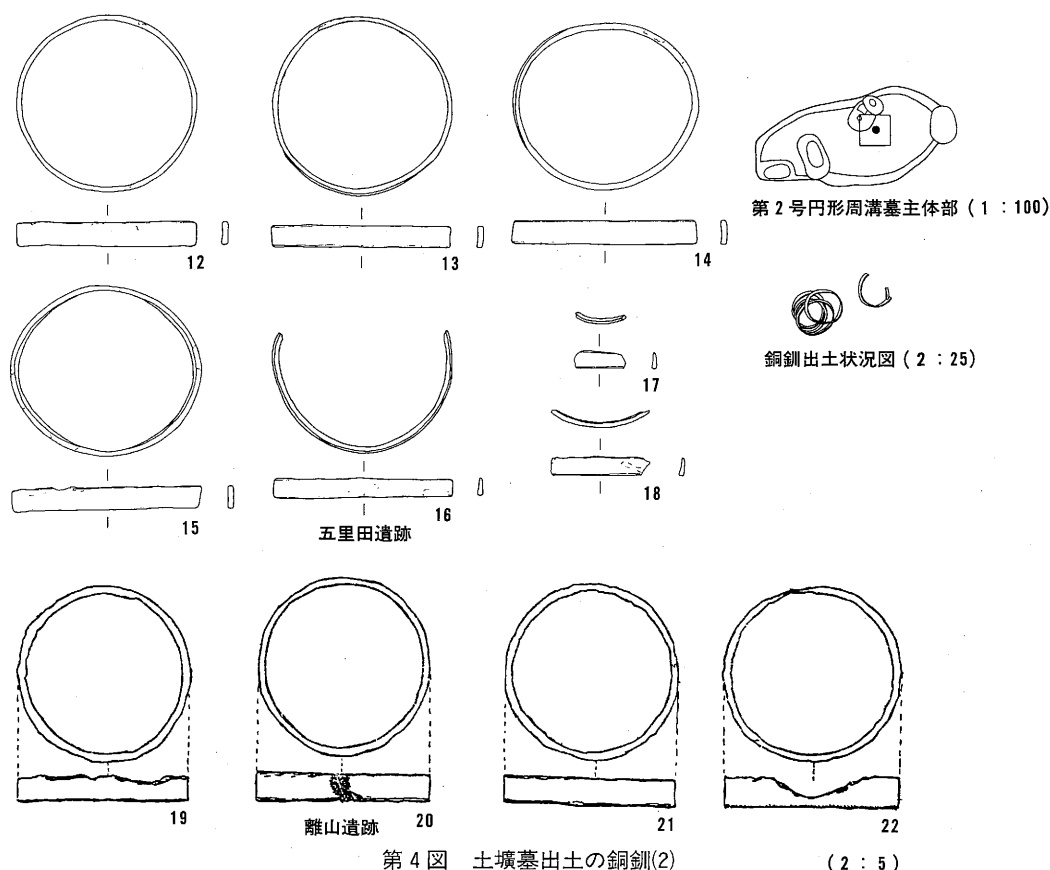
第2表 帯状円環型銅鈎出土遺跡（長野県外）

遺跡名	所在地	出土遺構	個体数	形態 (図版No.)	備考	文献
新保遺跡	群馬県高崎市	2 B 溝 D 溝	1 1	…C (41) …B (31)		18
有馬遺跡	群馬県渋川市	7号周溝墓 主体部SK387	4	4点…a (2)	被葬者右腕に4連結で着装	19
川合遺跡	静岡県静岡市	水田検出面土層	6	2点…B (27・33) 1点…C (—) 4点…D (51・53・58)		20
椿野遺跡	静岡県浜松市	SB01 (竪穴住居址)	1	…C (—) 湾曲形状 1/4以下	同遺跡には銅鉄6点が出土	17
伊場遺跡	静岡県浜松市	不明	1	…C (—) 径3.4湾曲形状2/3		17
耳川遺跡	静岡県菊川市	包含層	1	…C (—) 湾曲形状 1/4以下		17
上藪田・モミタ遺跡	静岡県藤枝市	掘立柱建物址 (柱穴内)	1	…D (—) 径1.5cmの小銅環		17
登呂遺跡	静岡県静岡市	No.1-48住居址 (竪穴住居址)	4	2点…B (—) 湾曲形状 1/2 2点…D (—) 径1.7・幅1.0の小銅環 径1.7~2.0・幅0.7の小銅環		17
		溝状遺構 (第1礎板列)	4	2点…a (—) 径6.0・幅0.9 環形状の歪みあり 2点…D (—) 径1.3・幅0.65 小銅環 径1.55~2.0・幅0.95 小銅環		
小黑遺跡	静岡県静岡市	包含層	3	2点…D (—) 径1.7・幅0.7 小銅環 1点…C (—) 径1.7・幅0.6 垂飾小銅環 湾曲形状 1/4以下 他に有鉤銅鈎片1点と銅環2点の出土が報告		17
豆生田遺跡	静岡県沼津市	土坑2	1	…D (57)		17
雌鹿塚遺跡	静岡県沼津市	1号住居址 (竪穴状遺構)	1	…C (36)		21
		遺構検出面	8	4点…D (49・55小銅環/59・60垂飾小銅環) 4点…C (40・42~44)		
矢崎遺跡	静岡県駿東郡清水町	不明	2	…C (—)	この他に有鉤銅鈎片1点出土	17
山木遺跡	静岡県田方郡菰山町	包含層	3	1点…a (23) 2点…B (—) 湾曲形状 1/2		22
三殿台遺跡	神奈川県横浜市	314-B号住居址 (竪穴住居址)	1	…D (—)	径1.8~2.0・幅0.8 小銅環	23
		306-C号住居址 (竪穴住居址)	2	1点…B (—) 湾曲形状 1/3 1点…D (—)	径1.8~2.1・幅1.0 小銅環	
山王山遺跡	神奈川県横浜市	57号住居址 (竪穴住居址)	1	…D (60)	炉内出土	24
新羽大竹遺跡	神奈川県横浜市	7号住居址 (竪穴住居址)	1	…D (—) 径1.5~1.7・幅1.2小銅環(有孔で垂飾か)		25
根丸島遺跡	神奈川県秦野市	詳細不明	10点以上	…C・D (—) ④が複数	他に有鉤銅鈎片1点出土 径2.2~2.4・幅0.9 小銅環	17
千代光海端遺跡	神奈川県小田原市	1号住居址 (竪穴住居址)	1	…D (59)		17
赤坂遺跡	神奈川県三浦市	竪穴住居址	2	…D (—)		17
東山北遺跡	山梨県東八代郡中道町	2号方形周溝墓 周溝内	1	…D (54)	周溝内からは土器・土製品・玉の他に銅鉄・鉄刃などの金属製品が出土	26
金の尾遺跡	山梨県中巨摩郡敷島町	特殊7号遺構 (土壙墓)	1	…C (—) 湾曲小破損品2片	ガラス小玉7個と共伴	27
下戸塚遺跡	東京都新宿区	18号竪穴住居址 25号竪穴住居址 27号竪穴住居址	1 1 1	…C (37) …C (32) …D (36 垂飾小銅環)		28
根田遺跡	千葉県市原市	方形周溝墓主体部	5	5点…A (—) 5点…A (—)	径5.5・幅1.0 径5.8・幅1.0	29
賤機山古墳	静岡県静岡市	賤機山古墳下土 墳墓	※6	…a (—) 径7.0 幅2.0	50cm上部から弥生土器出土	30

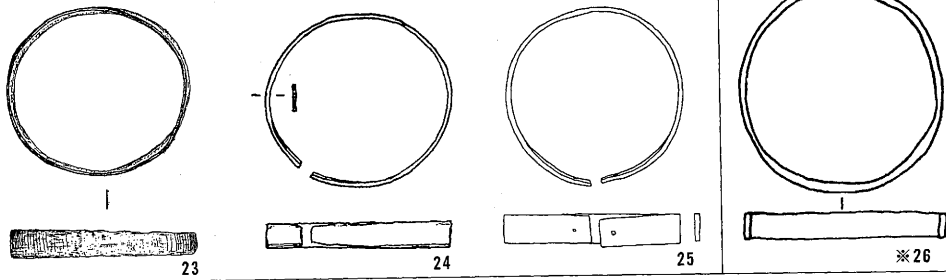
(a類・④類の内で図版掲載しなかったもののみ計測値を提示した。※は古墳時代の可能性がある。)



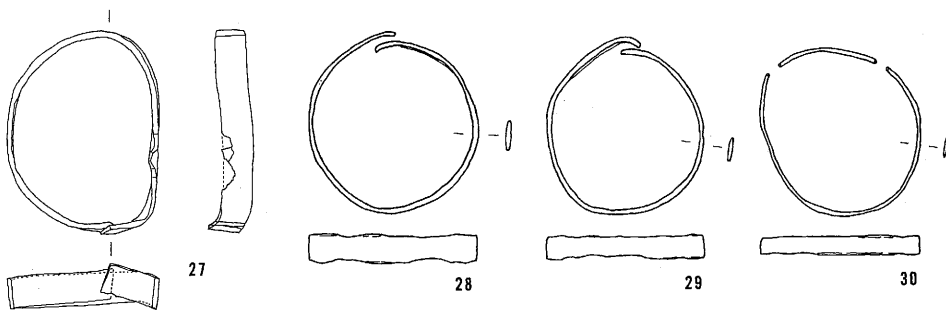
第3図 土墳墓出土の銅釧(I)



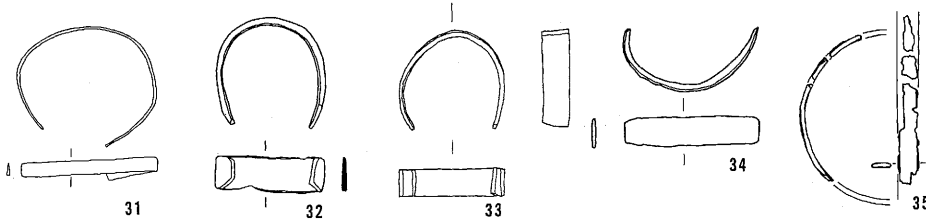
a 類 環型銅釧



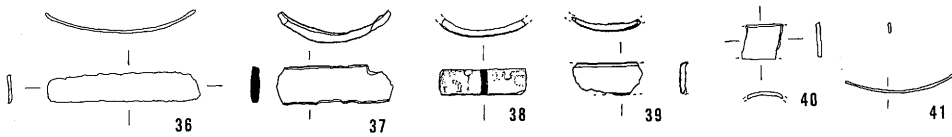
b 類 環型を残す銅釧



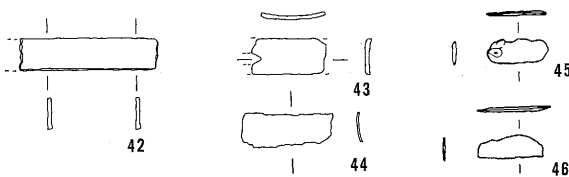
b 類 裁断され湾曲形状を残す銅釧



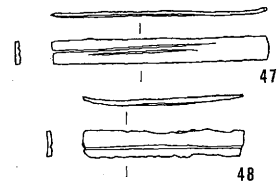
c 類 裁断破片



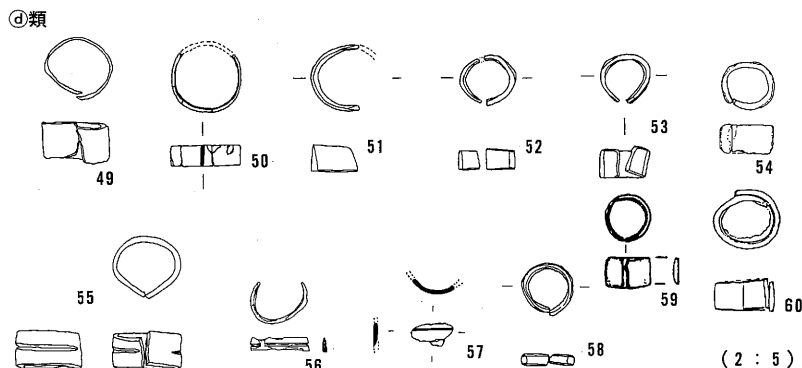
c 類 扁平形状の破片



e 類 再加工された銅釧



第5図 環型銅釧と裁断銅釧 (2 : 5)



第6図 銅釧再生の小型銅環

る緩く湾曲する形状と下戸塚遺跡(61)の扁平形状の2種があり、垂飾品と考えられる。小型銅環④類は、法量や裁断面の閉じ合わせ形態、条刻などから身体への装飾部位を想定することが可能である。

以上6種類に分類し、このうち製品として着装もしくは使用された釧・環は、④ないしa類と④類であり、b・c・e類は④類から④類への製作過程を示す資料とされる。ただし破片や未製品だからといって④類以下が銅釧のもつ『本来の特殊性』を失ったとは考えていない。次に④類と④類の出土状況から銅釧と小型銅環の用途について述べることにする。

Ⅳ 銅釧の用途・出土状況

④類の円環銅釧は、本村東沖遺跡・上直路遺跡・五里田遺跡・離山遺跡・北高根A遺跡・家下遺跡の長野県6遺跡37例と群馬県有馬遺跡4例、静岡県山木遺跡1例がある。北高根A遺跡を除き直径6.0cm、幅1.0cm前後の値であり外見は同一鋳型から鋳造された釧の様相を示している。これら完存する銅釧は、遺構の不明確な北高根A、山木例を除くと全て墓壙からの複数出土ある。以下に④類及びa・④類を含めた墓壙出土の状況及び釧にかかわる報文についてまとめる。

A 墓壙関連出土の銅釧について

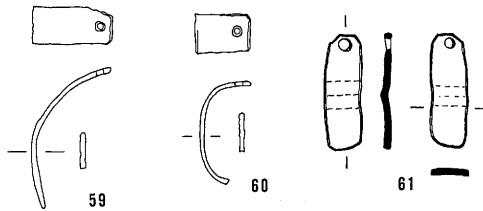
□五里田遺跡出土の銅釧(三石・平尾ほか1999)(第4図、第1表)

円形周溝墓主体部から破片を含め7点が集合して出土した。破片3点は1個体となる可能性が高く、円環を呈する釧が5点となる。釧内には人骨が僅かに残り5連の銅釧が片腕に装着されていたことがわかる。この周溝墓主体部からの副葬品はない。この銅釧について県内初となるケイ光X線分析及鉛同位体比測定が実施され注目すべき結果が報告されている。それによると『鉛同位体比の測定値から弥生時代後期の銅鐸が集中する規格化された鉛領域であった。5個の銅釧は全て同じ湯で製作されたものとは言及できないが(中略)誤差範囲内に入ることから同一の湯を使って鋳造した可能性がある。』としている。

□本村東沖遺跡出土の銅釧(寺島1995)(第3図、第1表)

墓壙から5個連なった状況で出土した。釧内には手首と思われる人骨が確認され、5連が片

③類



(1:2)

第7図 銅釧再生の垂飾品

て左右に分かれ、破片を含めて合計21点に及ぶ。東側にはほぼ完存する5個があり、内2個は連結状態で、西側には連結状態で6個と、破片を復元して4個の計10個があった。釧内には人骨がそれぞれ残存し装着されたまま埋葬されたことが確認された。南頭位で葬られたと判断され右腕5連、左腕10連となる。

□家下遺跡出土の銅釧（小池1995・1996）（註4）

土壙2基と周溝墓主体部からそれぞれ複数の銅釧が出土した。1遺跡で複数の墓壙から銅釧が存在する例は本遺跡以外にない。土壙は2基とも隅丸長方形プランを呈し、木棺墓が想定されている。第90号土坑からは高杯と多量の人骨片とともに4連で出土し、第100号土坑からは内側に人骨片を伴って3連の銅釧が出土した。釧の在り方から片方の腕に装着されていたことは間違いない。

これに対し周溝墓主体部からは接合端部に開きのある直径約3.5cmの小型銅環2個が、勾玉1点、ガラス小玉約65点とともに出土した。小型銅環2個は勾玉の下に位置しこれらを中心にガラス小玉が散在する状況であった。周溝墓は不正方形プランで、主体部は3基確認されている。いずれの主体部も木棺施設が想定されているが、副葬品及び装飾品が存在した主体部は銅環出土の本址1基のみである。

□有馬遺跡出土の銅釧（佐藤1990）（第3図、第2表）

7号不整形周溝墓内の礫床木棺墓SK387から連結状態で4個出土した。同礫床木棺墓からは歯骨が出土し、性別は不詳であるが壮年期であることが確認された。7号墓にはSK387を含め礫床木棺墓の主体部が大小10基検出され、本址以外の主体部からは銅鏃、鉄釧片やガラス小玉等が出土している。

B 銅釧本来の在り方

以上の5遺跡の他に離山遺跡出土の銅釧（第4図）があり人骨、弥生土器と共に出土したことが報告されている（八幡1928）。これらの事例から、銅釧は複数による連結装着が原則であることが確認される。連結数の最小が家下遺跡第100号土坑の3連で、最高が上直路遺跡の左腕10連であるが、同遺跡右腕が5連であることから3～5連が釧の単位として用いられたこととなる。この複数連結装着こそが、釧そのものがもつ『本来の機能』を示すもので、単独装着はないと考えられる。つまり被装者の腕には、ある年齢（10歳前後）までに直径6.0cmの銅釧4連前後が同時に装着されたことを示している。有馬遺跡の人骨鑑定では性別は明らかではな

腕に装着されたまま埋葬されたことが知られる。この墓壙には鉄鏃1点、管玉35点、ガラス小玉10点が出土したが、管玉は遺体に撒き散らした状況が想定されている。

□上直路遺跡出土の銅釧（林1998）（第3図、第1表）

竪穴住居内の土壙底面から4個体の完形土器と共に出土した。釧はまとまりをもつ

かったが成人との所見があり、被装者は『釧着装者としての役割』を完了して埋葬されたと推測される。

では墓壙出土例で連結されていない銅釧を出土した篠ノ井遺跡群北陸新幹線地点例（田中1999）、先の家下遺跡周溝墓主体部例、金の尾遺跡例と檀田遺跡例についてみることにとする。篠ノ井遺跡群北陸新幹線地点は、55基の円形周溝墓が群をなす墓域（田中ほか1998）であり、このなかのSM213周溝墓の主体部から、接合部（継ぎ目）がある円環形状のa類が出土した（25）。この銅釧は遺存状況がよく、接合両端部には一対の小孔が穿たれている。田中氏は出土状況について『腕への着装は明確ではなく』、銅釧の小孔について内側から外側に向かって穿孔されたと推定している。つまりこの銅釧は2次加工として穿孔され、腕への着装ではなく垂飾として使用されていた可能性が高いといえる。更にSM213は隣接する『SM214周溝墓に追葬された施設』と評価されていることは、本来銅釧が着装されるべき被葬者が別にいた可能性を示唆している。

これと同様なことは家下遺跡の8号周溝墓主体部出土例、金の尾遺跡土壙墓出土例（末木1987）からも認められる。家下遺跡の銅釧は直径3.5cmで裁断面が開く形態の④類銅環である。この主体部からは1点の勾玉と多数のガラス小玉が同一面から出土している。銅環は量及び出土状況から勾玉、ガラス小玉と一連のものである可能性が高く、頭部周辺（耳か）に着装されていたと推測される。またこの遺跡には連結釧を着装した土壙墓が存在し、8号周溝墓には3基の主体部がある。3基の主体部の前後関係は明らかではないが、銅釧着装者に追従する被葬者の存在が浮かび上がる。しかし小型銅環④類が埋葬主体部に残る例は家下遺跡以外になく、これについては後述する。

金の尾遺跡の土壙墓からは破損した銅釧片2点がガラス小玉とともに出土している。銅釧本来の原形が④類となるか篠ノ井遺跡出土例と同じく穿孔されているかは不明であるが単独出土は明らかで、ガラス小玉との共伴から腕への着装はなかったものと推測される。

檀田遺跡では円形周溝墓主体部から銅釧1点と鉄釧3点の合計4連が片方の腕に着装された状況で出土している（註5）。詳細は明らかではないが、これまでの事例では銅釧と鉄釧の同一遺跡出土はあっても同一被葬者への着装はなかった。筆者は銅と鉄の素材に機能差（着装者の役割格差）を推察しているので本例に関しては遺物処理が終了した時点で検討したい。

檀田遺跡例を除く埋葬施設での単独銅釧及び銅環出土は、腕輪としての着装でないことが明らかとなった。銅釧は、複数連結が外れた時点で腕輪としての用途が失われ、腕輪以外の装身具・呪術具に変化していったことを示している。

V 小型銅環の用途・出土状況

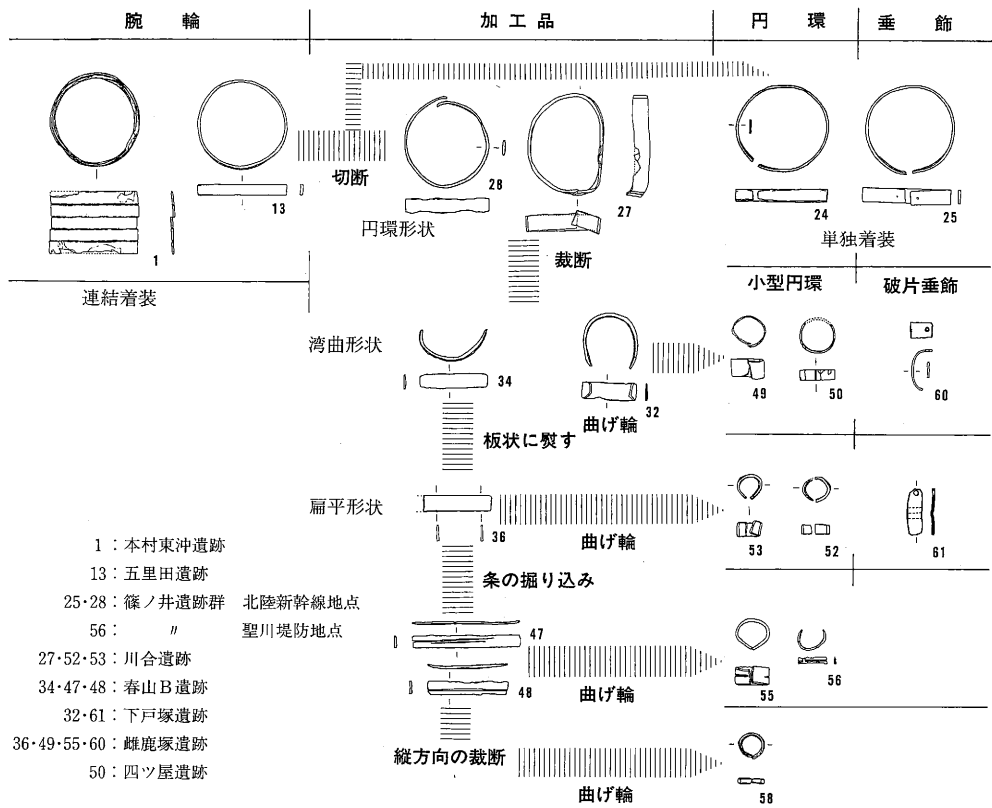
④類には小型銅環（以下小型銅環④類と呼ぶ）と穿孔銅釧破片（以下垂飾④類と呼ぶ）がある。報告されている出土遺構は、竪穴住居址内が12例、埋葬施設が3例、水田など生産域関連からの出土が2例であり、竪穴住居址出土が大半を占める（註6）。住居内の出土位置については多様であるが、山王山遺跡で小型銅環④類（60）が炉内から出土していることは興味深い。

埋葬施設からの出土は、先述した家下遺跡のほかに篠ノ井遺跡群聖川堤防地点（56）と東山北遺跡（54）の2例があるが、いずれも周溝内埋土からの出土で、被葬者への着装とはかわりがない。このほかに川合遺跡と雌鹿塚遺跡では居住・埋葬以外の場所から複数の出土が報告されている。川合・雌鹿塚の両遺跡は水田検出面で、遺構にかかわる出土地点が限定できないのが残念であるが、④類の役割が生産遺構で完了したことは注目される。

小型銅環や破片垂飾は、家下遺跡の周溝墓主体部出土の特殊例を除き、全て着装されない状況で出土している。これは銅釧（②・a類）が被葬者に着装されたまま埋葬されるのとは大きく異なり、④類が埋葬施設を含めても主体部に持ち込まれない原則があったことを示している。つまり円環形状を失った銅釧は、着装者が所持する役割を担ったのではなく、銅釧片そのものに役割が担われていると解釈され、銅釧が『永久的に身につける品』であったのに対し、『行為に必要な道具』に変化したしたのである。そして『ある行為に必要な小型銅環・破片垂飾』は、集落域や生産域といった生活に密着した場所でその役割が終了している。

VI 銅釧の再生（第8図）

円環形状以外の⑤・⑥・⑦類も④類と同様に大半は竪穴住居址内から出土している。青銅製品が数多く住居内に残される要因については銅鍬など各種銅製品とともに検討を要する課題で



第8図 銅釧の再生工程復元図

あるが、銅釧片に関しては先に触れた小型銅環㊤類と同一の観点から『銅釧のもつ役割』の一行為として遺棄あるいは廃棄された状況といえる。では円環型銅釧から小型銅環までの工程を複数の出土銅釧破片から復元することとする。

A 銅釧の切断

銅釧は直径約6.0cmの円環を呈する。銅釧（腕輪）としての機能は複数連結で、単体での腕着装はないことは先述した通りであり、単体になった時点で腕輪としての機能はなくなる。では円環形状を残したまま1カ所が『切断』されるのはいかなる事情によるものなのであろうか。切断要因については推測の域をでないが、腕着装の銅釧を解体したか、未着装の円環銅釧を破壊したかのいずれかである。筆者は、貝輪からくる釧の呪術性と年齢10歳前後までにしか着装が不可能な法量、更に着装者が個人所有の装飾品とし埋葬されることから、銅釧着装者の腕から着脱した痕跡として『切断』が行われたと考えている。つまり幼年期から特殊な役割を担わされていた人物（個人が担った役割）が何らかの事情により腕輪をはずす必要が生じ、その人物が担うべき役割が銅釧という『道具』へ委譲されたと推測する。

切断された銅釧は円環形状を残したa類として篠ノ井遺跡群北陸新幹線地点出土（25）の垂飾品に再生される。

B 銅釧の裁断

着装者の腕を離れた銅釧は生活空間で、その役割を担うことになる。各種の装身具に変化し所持していたことが窺えるが、それらは集落内の生活空間で個々に役割を完結する。円環形状を残す㊤類銅釧は、器形の歪みと切断部の重なりから切断直後の状況を示す資料である。この㊤類は腕輪としての着装も可能であるが、28・29を出土した篠ノ井遺跡群SB217は柱穴のない小型住居で出土し遺棄された可能性が強く、切断釧が腕輪として再生された可能性は薄い。

この円環形状の㊤類から更に幾つかに裁断される。比較的大型で湾曲形状の㊤類、更に板状に熨（の）されて扁平形状となる㊤類に変わる。この形状から『曲げ輪造り』により銅環（㊤類）に再生される。装飾品の部位は推測の域をでないが、家下遺跡周溝墓主体部出土例2点が直径約3.5cmの裁断面が開く形態で頭部付近にあることから耳飾りの可能性があり、直径約2.0cmで裁断面が重なる形態の小型銅環は指に着装された可能性もある。また穿孔された釧片は垂飾にされたと考えられるが、無孔であっても小型銅環には垂飾の可能性もある。

裁断され扁平形状になった㊤類は更に、条刻をされた㊤類に至る。そして条刻銅釧㊤類から『曲げ輪造り』により小型銅環に再生されるものと縦方向の裁断により幅を減じて小型銅環に再生されるものがある。また各段階の製品としては破片に穿孔した垂飾がある。

C 銅釧へのこだわり

連結着装された銅釧は、着装者から切断されてからなぜここまで多様な形状に変化して再生するのであろうか。銅釧と原形を失った各種再生銅釧のもつ『本来の機能』『役割』についての答は今のところでもち合わせてはいない。はたして貝輪や有鉤銅釧、巴形銅器の解釈として用いられる『呪術具』、着装者の『司祭者的役割』だけで解決されるのであろうか。带状円環型銅釧には、その名称が示す様に『呪い』の要素となる突起はなく、東海東部域には有鉤銅釧

をも分布している。有鉤とは異なる銅釧のもつ役割はいかなるものか今後の課題としたい。

VII 銅釧製作にかかわる課題と鉛同位体比による検討

青銅製品の鑄造は、各種鑄型の出土から北部北九州を中心に畿内にまで及んでいることが知られる。この原料については、鉛同位体比の分析によって弥生時代後期の青銅器が画一的な領域に集中することが明らかにされ（平尾・榎本1999）、華北地方の銅が金属塊（インゴット）として搬入されたとする見方もある（馬淵1989）。本稿の帯状円環型銅釧についても平尾良光氏らによって、数遺跡の分析がなされている。分析された銅釧・銅環は、第IV項で記述した五里田遺跡（12～18）の5点、有馬遺跡（2）の4点と下戸塚遺跡（32）、東山北遺跡（54）の各1点があり、『近畿・三遠式銅鐸、広形銅矛などが集中する“規格化された材料”と推定される』という結果が導き出されている。同一の鉛同位体比は同一地域の有鉤銅釧や銅鐸にも該当している。恐らく五里田遺跡や有馬遺跡出土の銅釧と同一の法量を示す②・a類釧は、類似する分析数値となるであろう。

一方、静岡県賤機山古墳下土壙から出土した帯状円環型の鑄造銅釧6個は、鉛同位体比の分析で先述とは異なる華南産の数値を示した。この銅釧は直径が約7.0cmで幅が約2.0cmと通常の銅釧より大きい。平尾氏はこの分析結果に対して華南産の鉛同位体比は、華北産が弥生時代の規格資料を示す指標と同じく、古墳時代の青銅器に通有の値であるとし、『古墳時代の所産である可能性』を指摘している。この銅釧の直径とほぼ同じ鑄造銅釧が長野県北高根A遺跡からも出土している。幅は0.9cmでやや小さいが、出土状況からも確実に弥生時代に帰属するとは言えない。北高根Aの銅釧は鉛同位体比分析が行われておらず、いずれの値になるかは不明である。これらの例を単純に古墳時代の所産とするか、あるいは弥生時代後期に属する異なる鑄型・鑄造原料とするかは資料の観察と分析結果の蓄積とを合わせて検討せねばならない課題である。

また帯状円環型銅釧はどこで鑄造されどのような経緯、ルートで中部・東海・関東に広がりをもったかも追及しなければならない課題である。筆者は、完存する銅釧の数量的な見地から千曲川流域で鑄造されていた可能性が最も高く、善光寺平南部の篠ノ井遺跡群、屋代遺跡群もしくは佐久地方で鑄型が存在することを予想している。そしてその交易・伝播ルートは、善光寺平・佐久地方を基点として家下遺跡が所在する諏訪盆地、釜無川沿いに金の尾・東山北遺跡の位置する甲府盆地を経由して富士川沿いに静岡平野に拡散していった経路が妥当であると考えている。更に、この銅釧・再生銅釧の伝播経路で鍵を握るのは1遺跡で複数の墓壙から銅釧を出土した茅野市家下遺跡であることを付け加えておきたい。

VIII 今後の課題

本稿では中部地方と東海東部地方に分布する帯状円環型銅釧を取り上げ、銅釧から小型銅環・破片垂飾までの再生、その役割・機能の変化を論じた。銅釧の有する「本来の機能」「着装者の役割」といった本質的な問題が残されている。これに関しては、今回は触れることができ

なかった本地域の銅と鉄の素材の異なる釧の存在から追及できる可能性がある。恐らく銅釧着装者と鉄釧着装者の役割には階層社会への兆を読むことができそうである。今後、銅釧に限らず青銅製品全般、鉄製品についても地域の特性を取り上げて周辺地域との関係を考えていきたい。とかく弥生時代の地域間交流を扱う場合には、西日本、東海地方の情勢が中心に取り上げられるが、北陸、中部、関東地方の情勢も1小地域に留まらず広域で西日本を変貌させる要因となっている。小稿に関する大方の御叱正を乞うものである。

文末になりましたが、本稿を草するにあたり西嶋力、風間栄一、小池岳史各氏には多くのご教授、ご協力を賜った。ことに編集者の土屋積氏には半ば強制的に本稿発表の機会をあたえて頂いた。銅釧の実物観察に際しご配慮して頂いた多くの方々に対し記して感謝いたします。

註

- 1) 長野市教育委員会風間栄一氏のご教授による。
- 2) 銅釧の出土遺跡に関しては、帯状円環型銅釧として写真、実測図もしくは実見によって確認したもののみを扱った。第1・2表記載以外にもいくつかの報告があるが未確認のため取り上げなかった。今後資料調査にあたりたい。
- 3) 千葉県市原市根田遺跡からは、5連の銅釧が、富津市打越遺跡からは13点の銅釧片が出土している。本稿を執筆するにあたり実見できず、両遺跡については扱わないが、千葉県の釧の在り方は、中部高地に類似している。
- 4) 遺物は未報告であるが、茅野市教育委員会小林深志・小池岳史両氏のご配慮により遺物実見及び計測をさせて頂いた。
- 5) 長野市教育委員会飯島哲也氏のご教授による。現在、出土遺物及び着装人骨が脆弱なため土壌ごと樹脂で硬化されている。このため銅釧及び鉄釧の形態、着装状況は実見できなかった。
- 6) 根丸島遺跡の小型銅環⑥類の出土の大半は竪穴住居であり、今後未報告の遺跡が公表されれば更に竪穴住居出土例が増加し、傾向として顕著になることが予想される。

引用参考文献

- 石川 治夫：1990「雌鹿塚遺跡発掘調査報告書Ⅰ・Ⅱ」 沼津市教育委員会
- 井上 洋一：1989「銅釧」『季刊考古学』 第27号
- 白居 直之：1999「春山遺跡・春山B遺跡」 長野県埋蔵文化財センター『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書11』
- 木下 尚子：1980「弥生時代における南海産貝輪の系譜」国分直一博士古稀記念論文集『日本民族とその周辺』考古編』
- 木下 尚子：1983「貝輪と銅釧の系譜」『季刊考古学』 第5号
- 小池 岳史：1995「家下遺跡」 茅野市教育委員会
- 小池 岳史：1996「家下遺跡Ⅱ」 茅野市教育委員会
- 佐藤 明人：1990「有馬遺跡Ⅱ 弥生・古墳時代編」 静岡県埋蔵文化財調査事業団『関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書 第32集』
- 末木 健：1987「金の尾遺跡・無名墳（きつね塚）」 山梨県教育委員会『山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第25集』

- 高倉 洋彰：1975「右手の不使用 南海産貝製腕輪の着装の意義」『九州歴史資料館研究論集』1
- 田中正治郎・澤谷昌英：1998「篠ノ井遺跡群・石川条里遺跡・築地遺跡・於下遺跡・今里遺跡」長野県埋蔵文化財センター『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書4』
- 田中正治郎：1999「篠ノ井遺跡群出土の銅釧」長野県埋蔵文化財センター『紀要7』
- 寺島 孝典：1995「浅川扇状地遺跡群 本村東沖遺跡II」長野市教育委員会
- 林 幸彦：1998「上直路遺跡調査報告書」佐久市教育委員会『佐久市埋蔵文化財 年報6 平成8年度』
- 平尾 良光ほか：1999「鳴沢遺跡群五里田遺跡出土金属資料の自然科学分析」佐久市教育委員会『佐久市埋蔵文化財調査報告書 第74集』
- 平尾 良光・榎本 淳子：1999「古代日本青銅器の鉛銅位対比」『古代青銅の流通と製造』
- 馬淵 久夫：1989「青銅器の原料と生産」『季刊考古学』第27号
- 三島 格：1973「鉤の呪力—巴形銅器とスイジガイ」『古代文化』22-5
- 三石 宗一：1999「鳴沢遺跡群 五里田遺跡」佐久市教育委員会『佐久市埋蔵文化財調査報告書 第74集』
- 八幡 一郎：1928「南佐久郡の考古学的調査」

第1・2表参考文献

- 1 長野市教育委員会：1995『浅川扇状地遺跡群本村東沖遺跡II』
- 2 長野県埋蔵文化財センター：1999『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書11 春山遺跡・春山B遺跡』
- 3 長野市教育委員会：1980『四ツ屋遺跡・徳間遺跡・塩崎遺跡群』
- 4 長野県埋蔵文化財センター：1994『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書14 鶴前遺跡』
- 5 長野市教育委員会：1992『篠ノ井遺跡群(4) 聖川堤防地点』
- 6 長野県埋蔵文化財センター：1998『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書4 長野市内その1篠ノ井遺跡群』
- 7 長野市教育委員会 風間栄一・飯島哲也両氏のご教授による。
- 8 上田市教育委員会：1989『琵琶塚 II』
- 9 佐久市教育委員会埋蔵文化財課：1998『佐久市埋蔵文化財 年報6』
- 10 佐久市教育委員会：1987『北西の久保 長野県佐久市岩村田北西ノ久保遺跡第2次発掘調査報告書』
- 11 佐久市教育委員会：1999『五里田遺跡 長野県佐久市根々井鳴沢遺跡群五里田遺跡発掘調査報告書』
- 12 八幡一郎：1928『南佐久郡の考古学的調査』
- 13 丸山敏一郎：1968『長野県菅平 陣の岩岩陰遺跡調査概報』信濃Ⅲ次第20巻5号
- 14 長野県教育委員会：1973『昭和47年度長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 上伊那郡南箕輪村その1・その2』
- 15 茅野市教育委員会：1995『家下遺跡平成6年度茅野市横内土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 16 茅野市教育委員会：1996『家下遺跡II平成7年度茅野市横内土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 17 埋蔵文化財研究会：1986『埋蔵文化財研究会第20回研究集会 弥生時代の青銅器とその伴関係』
- 18 鉾群馬県埋蔵文化財調査事業団：1986『新保遺跡I 弥生・古墳時代大溝編—関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第1集』
- 19 鉾群馬県埋蔵文化財調査事業団：1990『有馬遺跡II 弥生・古墳時代編—関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第32集』

- 20 助静岡県埋蔵文化財調査研究所：1992『川合遺跡遺物編 2 平成 3 年度静岡バイパス（川合地区）埋蔵文化財発掘調査報告書（石製品・金属製品）』
- 21 沼津市教育委員会：1990『雌鹿塚遺跡発掘調査報告書Ⅰ・Ⅱ—狩野川西部流域下水道事業処理場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』
- 22 韭山町山木遺跡発掘調査団：1969『山木遺跡—第 2 次調査概報—』
- 23 横浜市教育委員会：1965『三殿台』
- 24 神奈川県埋蔵文化財センター：1985『山王山遺跡』
- 25 神奈川県埋蔵文化財センター：1980『新羽大竹遺跡』
- 26 山梨県教育委員会：1993『甲斐風土記の丘・曾根丘陵公園 東山北遺跡—第 1 次～第 3 次調査—』
- 27 山梨県教育委員会：1987『金の尾遺跡無名墳（きつね塚）山梨県中央自動車道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』
- 28 早稲田大学校地埋蔵文化財調査室：1996『下戸塚遺跡の調査第 2 部 弥生時代から古墳時代前期 早稲田大学安部球場跡地埋蔵文化財調報告書』
- 29 米田耕之助：1986「市原市文化財センター年報 昭和60年度」財団法人市原市文化財センター
- 30 平尾良光編：1999『古代青銅の流通と鑄造』